

平成24年12月1日発行（1月1日発行）第54巻第11号

み

misuzu
december 2012
no.611

森川すいめい「自死の少ない町にて」
中村健之介「ドストエフスキー・ノート」

す

ず

12



秋、穂高で

二〇一二年秋——。カツラや白樺、ニレ、マコモ、ナナカマドといった落葉樹林の紅葉を求めて上高地から穂高へ向かった。一冊の本をザックに放り込んで。

一冊の本とは、ある編集者との会話がきっかけで、数日前に購入した本だった。編集者との会話は「生き残った者の責務と呵責」といったような内容だった。もちろん、そんな深刻な主題をテーマに会話を続けていたわけではない。出版予定の翻訳本や雑誌の連載原稿の打ち合わせをしていた。そんななかで、本当に、ふとした話の流れで出てきた話題の一つが「生き残った者の責務と呵責」といったものだった。しかしその会話が、昨年の震災以降、再読したいと思っていた一冊の本を私に思い出させた。

初めて読んだのは高校生のときだった。このことはよく覚え

それ以外の記憶はすでに曖昧となっていた。

電車の中、途中の休憩所、山小屋、山頂と時間を見つけてはその本を再読していった。歩くのに疲れたとき、山頂から北アルプスの山並みを望みながら、あるいは山小屋に置かれた暖炉の前でページを重ねていった。本の中の言葉が心に沁み込んだ。

ぼろ靴につこんだ傷だらけの足の痛みに泣かんばかりになりながら、極寒のなか、氷のような向かい風をついて、長い行列を作って収容所から作業所までの数キロの道のりをよろめき歩き、収容所生活にまつわる些細な懸念を、絶えずよくよくと悩みながら、それでも本の著者は「人は強制収容所に人間をぶちこんですべてを奪うことができるが、たったひとつ、あたえられた環境でいかにふるまうかという、人間としての最後の自由だけは奪えない」と言い「わたしたちは、おそらくこれまでのどの時代の人間も知らなかった「人間」を知った。では、この人間とはなにか。人間とは、人間とはなにかをつねに決定する存在だ。人間とは、ガスを発明した存在だ。しかし同時に、ガス室に入っても毅然として祈りのことを口にする存在でもあるのだ」と語った。

引き込まれ、時間を忘れそうになった。それでも汗が引くと冷たい風に身震いする「わたし」がいて、それが私を現実に戻しき戻してくれた。現実に戻った私は自分を励ますように、山頂に向かって再び歩き始める。本の中の一言ひとことが脳裏を去来する。それを感じる「わたし」がいて、一方で、急登に息を

山本太郎

ている。利用する者もほとんどいない田舎の高等学校の図書館にその本はあった。図書館は、夕方になると西日が射す三階建ての校舎の一階の、隣は音楽室で、これも利用する者のあまりない、いつも人通りが少ない場所にあった。まさに時間と人の流れから断ち切られたような場所にある図書館だった。そんな図書館が好きだった。放課後の短い時間を、時々、そこで一人本を読んで過ごした。その本はそんな図書館の奥にひっそりと置かれていた。場所はいまでも覚えていて。西日がカーテン越しに差し込むその先に、その本は並んでいた。

「すなわち最もよき人々は帰ってこなかった」という著者の言葉と、銃を向けるナチスの兵士と母親らしき女性と子供の写った表紙の写真は長く覚えていた。ただ、その後再読した記憶もなく、そのときに感じた幾つかの激しい情動の記憶を除いて、

切らしながら歩く「わたし」がいた。疲れて休む時には、ザックの一番上にある本を取り出した。二人の「わたし」が、涸沢の山の紅葉やとザイテングラードを登るとき見た青い空と混然となり溶けていった。その対比に眩暈を覚えた。

* 著者である男は、やがて、一つの境地に達する。

収容所で毎日強制労働に従事する傍ら、自分の内面にだけ存在する、愛する妻との対話を試みるようになったという。精神的な会話を続けるうち、ついに、男は自分のそばに妻がいて優しく見守ってくれている気配を感じるようになった。凍った地面を何時間も掘り続けながらも、その感情は次第に強くなっていったという。そのなかで男は、一つの真理の持つ意味を悟った。たとえ、地上が荒廃してもは何も残っていないくても、人間は、愛する人間の像に心を深く捧げ、自らを充たすことが出来た時、全く慰めない世界をも乗り越えることが出来るという真理を、である。

この時、男の妻はすでに亡くなっていた。最愛の妻は、アウシュヴィッツ到着と同時にすでに殺されていたのである。男はそのことを知らなかった。しかし男は思う。この時、妻は明らかに存在していたのだ。

*

一冊の本とは『夜と霧 新版』——。一九〇五年にオーストリアに生まれた精神科医で心理学者であったヴィクトール・エミール・フランクルが強制収容所での体験をもとに著した本だった。「夜と霧」とは、元来、一九四一年二月六日に出されたヒットラーの特別命令の名称である。

そんななかで、フランクルは生きる意味を問うた。「わたしたちが生きていることからなにを期待するのではなく、むしろひたすらに、生きていることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ」と。

「生きる」ことに何かを期待すれば、その期待が裏切られた時、あるいは期待そのものを持ってなくなったりとき、人は生きる意味を失う。「(そう)でなく」とフランクルは言う。そうではなく、「生きる」ということがわたしたちに期待することは、何かと問うのである。そして、それは「私たち自身の存在のあり方」つまり「生き方」なのだ。言い換えれば、そうした「私たち自身の存在のあり方」を示すことが、運命と対峙させられるなかでさえ「生きる」ということだ、とフランクルは言うのである。私たち自身の存在のあり方をどう変えるかは、私たち自身でしかない。それは、現実があまりに過酷な場合、人々は現状を諦観し、将来の破局を選ぶことがあるといった考え方を拒絶し、未来への絶望という考え方を拒否する。

本を閉じて目を上げた。山小屋から小さなリュックだけを背負った空身に一冊の本を入れて登った奥穂高岳の頂上からは眼とは対照的に、収容所の殺伐とした灰色の棟の群れとぬかるんだ点呼場が広がり、水たまりは燃えるような天空を映していた。

わたしたちは数分間、言葉もなく心を奪われていたが、だれかが言った。

「世界はどうしてこんなに美しいんだ！」

自然は、人間の営みとは無関係に美しい。小さな人間の感傷など無視するかのような圧倒的な美しさで迫ってくる。

震災後に入った町で次のような医師の話聞いたことがある。津波で徹底的に破壊された岩手の病院では、その日、避難した屋上で医師や看護師、患者、そして避難してきた近所の人たちが新聞紙にくるまって夜を明かしたという。寒さの中、津波が引くのをみんなで見ていた。町は真っ暗だった。みんなが円になって集まった。中心には、子供とお年寄りがいた。昼間降っていた雪は、夜に入って、いつの間にか止んでいた。空を見上げた。星空がきれいだった、と。

医師は津波で妻を亡くした。

数日後、同じ場所、私が見上げた星空もきれいだった。生き残ったフランクルの苦しみは想像に余りある。それを癒すには、記憶を紡ぎ出し、それを物語として再構築する過程が必要だったに違いない。それがなければ、強制収容所を出た後

前にジャンダルムや洞沢岳が聳え、少し遠くに槍ヶ岳や常念岳、蝶ヶ岳、そして燕岳が見え、さらに遠くには立山連峰を望むことができた。

一〇月とはいえ、三〇〇メートルを越える山頂に吹く風は冷たい。体全体が、急速に冷え込んでくる。汗が引くと、一気に体感温度が下がる。本を閉じ下山の準備を始めた。防寒着を着込み、一気にジッパーを首の上まで上げ、歩き始める。一〇分ほど歩いただろうか、小高い岩を巻いて再び稜線に出た。そのとき、高く澄んだ空に浮かんだ雲がかすかに赤く染まり始めた。それが槍ヶ岳や燕岳に反射した。燃えるような山々がそこにあった。初めて見る山の夕焼け。「アーペンロート」だった。リュックの中の本にも、次のような記述があった。

「あるいはまた、ある夕べ、わたしたちが労働で死ぬほど疲れて、スープの椀を手に、居住棟のむき出しの土の床にへたりこんでいたときに、突然、仲間がとびこんで、疲れているのが寒がるうが、とにかく点呼場に出てこい、と急ぎたてた。太陽が沈んでいくさまを見逃させまいという、ただそれだけのために。」

そしてわたしたちは、暗く燃えあがる雲におおわれた西の空をながめ、地平線いっぱいには、鉄色から血のように輝く赤まで、この世のものとも思えない色合いでたえずさまざまに幻想的な形を変えていく雲をながめた。その下には、それ

の人生を生きていけなかったに違いない。それが、いかに筆舌に尽くしがたい過程だとしても。そんなことを考えた。妻を亡くした医師もまた同じかもしれない。

あるときフランクルは強制収容所のなかでひとりの仲間、なぜあなたの飢餓浮腫は消えたのでしょうか、とたずねた。仲間はおどけて打ち明けた。「そのことで涙が潤れるほど泣いたからですよ……」。

*

奥穂高近くの山小屋に泊まった日の夜、談話室では暖炉に薪がくべられていた。人々が思い思いの姿でくつろぎ、若い男女は何かを語り合っていた。

本の奥付を開いてみた。出版が二〇〇二年とあった。そこに収録されている旧版訳者のことば(霜山徳爾)には、初版として出版された『夜と霧』は一九五六年に刊行されたとある。副題は『ドイツ強制収容所の体験記録』となっている。私たちはふたつの『夜と霧』を持つ。

旧版は解説で、本の題名を『夜と霧』としたことを以下のよう記す。「フランクルの書の原題は *Ein Psycholog erlebt das KZ* 、『強制収容所における一心理学者の体験』とも訳すべきであろうが、日本語訳においては強制収容所の全貌をより簡潔に象徴すると思われる『夜と霧』をもって題名とした」。

非ドイツ国民で占領軍にレジスタンス活動を行ったと見なさ

れた者は、夜間秘密裏に捕縛され強制収容所に送られた。その安否や居所は家族や親戚にも知らされなかった。後にこれが拡大適用され、犯罪者は家族ぐるみ一夜にして消えた。これが「夜と霧」命令だった。

四半世紀ほど前に高等学校の図書館で読んだ本は、霜山徳爾氏訳の『夜と霧』だった。そして、いま、穂高に抱かれて新版を読み終えた。

読了後、小屋の外へ出てみた。空には雲がかかっているのか、星空は見えなかった。眼下に、洞沢に並ぶテントの光がかすかに見えるだけだった。その日、山は夜半から雪になった。朝目覚めると、外は一面の雪景色だった。訊けば、その年の初雪だという。山の秋は短い。二センチほど積もった雪で奥穂高は白く覆われていた。

岐阜県警山岳警備隊の若い隊員が「ザイテングラードの鎖場辺りで雪は消えます。気を付けて」と下山者を送り出していた。

「最近の書評紹介書より」

ライフアーツ 罪に向きあう

坂上香 取り返しのつかない罪を犯したとき、人は罪に向きあうことができるだろうか。終身刑もしくは無期刑受刑者であるライフアーツの更生を助ける民間団体、アミティの活動を紹介。 二七三〇円

ホロコーストの音楽 ゲットーと収容所の生

ギルバート 音楽はナチ支配下のユダヤ人ゲットーと強制収容所で、どのような役割を果たしたのか。本書は音楽を手がかりに、ホロコーストの深部と個人の内面への扉を開く。 二階宗人訳 四七二五円

そこに僕らは居合わせた

パウゼヴァング 「この時代の証言者はまもなくなくなる。だからこそ、真実を若い人に語り伝えなければならない」。自らの体験による語りつたえるナチス政権下の記憶。 高田ゆみ子訳 二六二五円

生殖技術

不妊治療と再生医療は社会に何をもたらすか

柘植あづみ 技術は不可能を可能にし、新たな選択肢を突きつける。子どもがほしいという願いが医療や国家プロジェクトへと連なる道筋と、生殖技術の構造を照らし出す、はじめての書物。 三三六〇円

(価格は税込)

子どもたちはラウンド型に並べられたテーブルにつく。テーブルの上には、おやつ

のクッキーやジュースが用意されている。食べたり飲んだりすることが、人と人を接近させ、話しやすい雰囲気をつくるのは、大人にしても子どもにしても同じだ。朝ならクロワッサンにココア、おやつというより朝食になる。

そんなふうに設定されたスペースで、子どもたちは生きていく上で遭遇するいろいろな問題を議論する。生と死、美と醜、男の子と女の子、子どもと大人、身体と精神、愛と友情など、テーマは多岐にわたる。「時間をかけることと時間をむだにすること」、「知っていることと知らないこと」、「たった少々ひねったものもある毎回ひとつのテーマがとりあげられ、選ぶのは子どもたちだ。

子どもたちはなにかの知識を得るためにやってくるわけではない。自分の考えを表現し、論拠にもとづいて話し、耳をかたむけ、意見をぶつけ合い、他者を尊重することを学ぶ。

これは「おやつ哲学」と呼ばれる催しで、フランスの図書館に十年くらい前からじわじわと浸透しはじめ、最近ますます広がりをし

3 図書館の可能性 おやつ哲学

辻 由美

めしている。議論すること、つまり言葉をかち合うことは、子ども（若者）が自分自身のプロジェクトを構築するのに非常に大きな役割をはたすという認識がその根底にある。

おやつ哲学は、あくまでも子どもたちの自由な発言の場でなければならず、仲介役の大人ひとり以外は、大人たちの傍聴はゆるぎされていないことが多い。たいてい司書がアニメーターとなるが、パリ市では、高校の哲学教師が市と契約して、あちこちの図書館をまわっている。

おやつ哲学は、哲学カフェのいわば子ども版である。哲学カフェは一九九二年マルク・ソテがパリのバステュー広場のカフェでは

じめた、日曜の朝のコーヒーを飲みながらの語り合いであることは、よく知られている。これがフランス全土に波及し、さらに国境を越えていった。

子ども向けの哲学の本はいくらでもあるが、「おやつ哲学ブーム」は、ミラン社が刊行しているブリジット・ラベの「おやつ哲学」シリーズ（三十巻を超えている）に負うところが大きい、幾つもの日常的なエピソードを連ねるかたちで書かれていて、どこから読み始めてもよく、議論のいとぐちを見つけやすい。ヨーロッパの諸言語に翻訳され、累計で百万部に達するという隠れベストセラー。邦訳も数冊（汐文社刊）。

おやつ哲学は、図書館が異なった人々の交流の空間であるべきだとする文化活動（アニメーション）の一例である。それ自体は決して新しくはないが、アニメーションを図書館活動の付随的なものではなく、貸し出やレファレンスと同様に、基本的なもののひとつとしてとらえるのは、新しい傾向だ。若い司書ほどそう考える人が多い。

図書館がそのアイデンティティを問い直さなければならない時代に来ているのだ。